

2009年バスは良い、ひとりさくら道

(2009年4月29日～5月1日)

山猫@滋賀

はじめに

毎年、桜の季節が来るとさくら道を走りたくなる。この思いは年々強くなる一方だ。今年は5ヶ月前に雪のさくら道を走った後なので、正反対の春のさくら道を味わいたいとの思いが強くなっていった。しかし、それに反して疲労が抜けない、身体が動かない、あちこちに痛みが出るなどして、年々身体が弱い方向に向かっているのも現実だ。50歳を過ぎているというのに、未だ10年前と同じような体力でいるような錯覚をしている。わかっている自分と全くわかっていない自分とが交差する。年齢の加算はわかるが、精神的にはまだまだ走れるとの思いの方が強いからだ。これも錯覚ということが、わかっていないことが問題なのだが…。

今年3月にドラマ「さくら道」が放送された。ドラマ内容うんうんは関係なく、今年は庄川桜を見に行く人が多いだろう。当然、さくら道を愛する私としてじっとしている訳にはいかない。早くから、GWにはさくら道を走ろうと決意し、景色の素晴らしい庄川桜から五箇山までは明るい時間帯に通過できるようスタート時間を考えるようにした。昨年11月は郡上八幡からスタートしたが、今回はその手前の美並インター口からスタートして、郡上八幡の町並み散策と再度、新緑の相倉合掌集落にも寄り道したいと考えた。それらを実現するにはどうしたら良いかという前提でスケジュールを組んだ。

とりあえず、過去の通過時間を今回の美並スタート時間に置き換えしてみた。ひとりで走った時とさくら道ウルトラで走った時と比べると名古屋をスタートし、後半バテバテになっているのに、さくら道ウルトラの方が早い。大会はみんなと一緒に走っているのがエイドもあるし、それなりに負けまいとする競争心も出る。しかし、自分ひとりだと途中で何回かゆっくり休む時間を持たないとスタミナも気持ちも続かない。その辺りは数字では表すことのできない難しいところだ。

当日

カレンダー上は30日出勤だったが、不況の関係で一斉年休となった。今回は昼に家を出発するので、できるだけゆっくり寝れば睡眠不足は解消できるだろう。ただ、その前の数日は毎日眠かったので、1日長く寝ただけで大丈夫だろうかという一抹の不安はあった。出発するまでの間、何度もトイレに駆け込んだ。何かいつもと違う緊張感が漂っていて、不安が過ぎた。

昼前に家を出て、岐阜に向かう。電車はもう少し混んでいるかと思ったが、そうでもなかった。買った弁当を車内で良く噛んで食べる。前回は車内に携帯電話を置き忘れたことを乗り換えしてから気づき、結局持たずに走った反省から、米原での乗り換えには十分気をつけるようにした。車窓からの田園風景を眺めると田植えの準備姿が目立つ。新緑も綺麗だ。左に薄く霞の掛かった伊吹山が見えるが、何故か今までと違った伊吹山に思えた。関が原付近から乗客の数が増えた。大垣で乗り換えし、岐阜駅にはバス時刻発車時刻の1時間前に着いた。駅から外に出ると駅前は大変な車の少なさに驚く。



半袖、ランパンになって、荷物をセブンイレブンから「金沢ゆめのゆ」に送り、岐阜バスターミナル14時50分の高速バスで郡上美並に向かう。25℃近く気温が上がっているのでランパンで丁度良いくらいだ。岐阜市内も同じく車の量は少なく、人々はどこへ行ったのだろうか？。東海北陸道に上がり、関辺りからは美濃の丘陵地が見え始め、陽光を受けた新緑が綺麗だ。ただトンネルの数が多いので、すぐに見えなくなってしまう。高速1000円化

で車の量が多く、特に対向の名古屋方面向きはかなり多い。美濃からは更に山深くなり、さくら道のコースと高速とが交差し、コース位置をイメージする。バスは郡上美並インターのゲートを抜けて、国道156号線脇のバス停まで降りる。ここが今回のスタート地点だ。丁度、「まん真ん中の里」の前になる。時間は予定より早く3分早い15時43分に着いた。



ひとりさくら道スタート

岐阜バス・郡上美並インター口

4月29日

15時45分



美並まで来ると思ったより、暑く感じなかった。ひとりなのに、何故か緊張しながら走り出す。デイパックに背負っているものは長袖シャツ、蛍光ウインドブレーカーの上着、ロングタイツ、軍手、小タオル、LEDライト2個、痛み止めのイブA、胃薬、エビオス、塩、傷テープ、メンソレータム、ティッシュペーパー、今回は初めて補給用に肉の缶詰、鉄分のゼリー、栄養ドリンク2本、箸とスプーン、地図、デジカメ、携帯、メモ用紙とボールペンなど。意外と小さい栄養ドリンク瓶でも重く感じた。帽子は汗かきには向かないが、おっさん用のJA帽子を被った。



走り始めると左に長良川が見え、山深い新緑の間をやや青みを帯びたせせらぎがゆったりと流れていた。少し進むと緩やかな下りが続き、居眠り防止用フクロウが3基ほど頭上に見えた。気温は21℃、陽射しが強いので、走り出すと思ったより暑い。この時期、今まで見たことのないほど車の量が多い。新緑が鮮やかで、日陰に入ると気持ち良い風がある。右側に過去入ったことのある「ラーメン美並」があった。



その先はさくら道に欠かすことのできない佐藤良二さんが植えた深戸の桜並木が長良川に覆い被さるように連なる。もうすっかり新緑の桜に変わっていた。桜並木の中に「深戸駅」があった。何回も通っていながら、通り過ぎるだけでじっくり見たのは今回が初めてだった。

深戸を越えると歩道がなく、道路脇も狭いので気を遣う。左右でどちらか幅の広い方の脇を進むようにした。この辺りは対向になるが、右側を進んだ。洞門やトンネルではさくら道ウルトラ同様に長良川沿いにある外の歩道



や旧道を通って危険を避けた。以前は1本しかなかった東海北陸道も2本になって上下に分離されているところも見受けられた。ずっと向かい風が続き、少しの上りでもきつく感じ始める。逆光も結構辛い。郡上八幡の看板が見え、山々の緑の鮮やかさが際立つ。結局、相生までは歩道はなかった。

ホテル「郡上八幡」が見え、ここには天然温泉「宝泉」がある。岐阜駅をスタートした2年前はこの辺りでバタバタになり、この温泉に入ったことを思い出す。その先のカーブではスピード要注意の表示なのか、路面一面は水色に塗られていた。2年前はなかったはずだ。洞門で外の歩道を進むと紫の藤が鮮やかに咲いていた。山の斜面のあちこちにも藤が見える。この時期の藤は見応えがある。この先の釣具屋の店先には水舟があり、過去には大きな丸太を掘ったものだったが、2年振りに見た水舟は檜風呂のようなものになっていた。老朽化で取り替えたのだろうが、悲しい気もした。ここでペットボトルに水を注ぐ。



その先にT字路があり、右に進むと「大滝鍾乳洞」に行けると表示されていた。その先の左側にあるオートレストランのところで右に折れて、旧道に入る。まだ17時だが、徐々に風が冷たく感じるようになってきた。

郡上八幡駅(11.7km)

4月29日

17時06分



郡上おどりの提灯がぶら下がっている「郡上八幡駅」に立ち寄ると「ふるさとの鉄道館」というコレクションが並んでいるコーナーがあった。初めての気付きだ。先に進むと『澄む水の夕月ゆらしている蛙』という歌が書かれたざるが飾してある店があった。その先には国道156号線と国道256号線が分岐するT字路に差し掛かる。256号線を右折すると高山方面に行けるが、高山方面に行き来する車がやはり多かった。



ここで予め用意した郡上八幡市街地マップを見ながら右斜めに進み、町並み散策をする。郡上八幡の真ん中を「吉田川」が流れていて、川を中心に町が形成されていた。山が近くまで迫っており、窮屈な場所に江戸時代からの古い商家や「やなか水のこみち」と呼ばれる用水に沿った柳の並木のある狭い路地、「宗祇水」は日本名水





百選の第1号に指定された清泉で郡上八幡のシンボル、石畳の坂道と朱塗りの欄干の清水橋、「最勝寺」は門前町の奥にある立派なお寺、「旧八幡町役場」は洋風で今は記念館となっている。遠くから「郡上八幡城」が古い町並みを見下ろしていた。郡上八幡といえば子供達が橋の上から川に飛び込むシーンが有名だが、一体それはどの橋なのだろうか？。マップを見ていると神社仏閣が非常に多い町のようだ。重厚な右から左へ横文字で書かれている看板のある古い商家も印象的だった。2年前のひとりさくら道で立ち寄った高山の町を小さくしたようなイメージの町に思えた。

そんな町中を走って散策し、また元の位置に戻ろうと進んで行くと幼い女の子を連れた地元の男性から、声を掛けられた。「さっき、リックを背負って走られている人を見かけたもので声を掛けさせて貰いました。どこまで走られるのですか？」と聞かれたので「金沢までの予定ですが・・・」から始めて数分の立ち話をした。彼はS見さんというランナーだった。先日のネイチャーランでは「自分のフルのペースで250kmを走られているのを見て凄いと思った」とそうだ。彼の義母もウルトラランナーで、定かではないがネイチャーランに出られたようなことを言われたと記憶している。義母は三重のチームKAZEに属されていると聞き、「H本さんもそうですね」と言うので「H本さんは良く知っています」とのこと。通りがかりの知らないもの同士、こんなところで接点があったとはまさに郡上八幡での一期一会だった。寄り道しなかったら、会うこともなかったのだから。写真を撮らせて貰って、郡上八幡を後にした。



45分の郡上八幡町並み散策を終えて、再び国道156号線に戻ると18時前になっていた。青かった空もねずみ色に変わり、太陽は間もなく山の谷間に沈もうとしていた。徐々に風も冷たくなって寒さも増し、半袖、ランパンでは寒いくらいだ。まだまだ車の量は多く、歩道のない道が続くので、気を引き締めて進む。S字カーブのところには牛舎があり、牛糞の強烈な臭いが鼻にきた。左を見ると薄暗闇の長良川の川面は光っていた。町の北側にある郡上八幡の看板を通り過ぎた。ここからは大和町だ。

右に公衆トイレがあり、8年前のさくら道では凄い数の虫に驚かされた場所だ。そろそろ腹が減ってきたので、目の前に飛び込んできた食事処に入ることにした。とりあえずサラダ抜きのカレーライス頼んだ。走っている時はカレーか、麺類に限る。店の人から「ネイチャー走ってなさるのか？」「ネイチャを走ったことはないですが、金沢を目指しています」「この先は冷えるから、そんな格好ではいけんよ」「何回も走っているし、着替えはあるので大丈夫ですよ」、そんな会話を交わした。カレーライスには思いっきりスパイスをかけた。店は薄暗く、メガネも出さなかったので何のスパイスかわ



からなかったが、元気になれば良いと思いつ切り掛け捲った。店内で半袖から長袖に着替え、ロングタイツを履き、LEDライトもデイパックから出す。

店を出たのは19時10分、先ほどまで激しかった往来する車の数はめっきり減って、別世界のようになっていた。これでこの先は当分頑張って走れると思いき走り出すが、全く走れない。何故なんだ？。しばらく歩けば、また走り出せるだろう。しばらく歩こう。そのうち、今までは狭かった歩道が綺麗に整備され、広がっていた。「奥長良の清水」という湧き水を汲める場所があったので、水を飲み、ペットボトルに注ぐ。ここの水は水道の蛇口があり、ここから自由に水を汲み出すことができるようになっていた。



JAおくみの大和前(24.2km)を通過。胃が詰まったように重くなって吐きたい気分になるが、吐くに吐けなくて逆に辛い。まだ25kmしか進んでいないのに、こんな状態では先はかなり危うい。緩くても下りがあれば走ったが、それ以外は走ろうにも身体が動いてくれなかった。走れる状態になるまで、辛抱することにする。西の空を眺めると明るい三日月が現れていた。今夜は冷えそうだ。

白鳥に入り、東海北陸道の高架が見えるまでは歩道がなく、その途中、昨年11月は紅葉が綺麗だった道路脇の木のところには外灯が明るくその木を照らしていた。左側にサークルKがあったので、イチゴヨーグルトとプリンを買って食べる。高架下を越えた辺りから歩道がまた現れた。「日本土鈴館」前を歩いて通過、手前は大きな招き猫が置いてあったが、裏側に進むと店のような雰囲気はなく、横には5月から法律事務所と表示されていた。日本土鈴館は残るかもしれないが、何れにしても縮小されるようだ？。



その先の白鳥市街地手前の高架下では気温は12℃を示していた。元気を付けるために1本目の栄養ドリンクを飲む。更に進むと明るい白鳥市街地が先に見えているが、ここで左折して「奥美濃大橋」を渡る。天気が良ければ、ここからは見事な白山が眺められるところだ。左に目を向けると大きくカーブする「油坂峠道路」の外灯が迫ってくるような感じがし、いつものことながら圧倒される。



いつも通り暗闇の中、公園を通り抜け、ややこしい民家の間を通って顕彰碑に向かう。どの民家からもカーテン越しに蛍光灯の灯りが見える。それに対してひとり、さくら道を寝ずに進もうとしている私とのギャップを感じる瞬間でもあった。ここは坂道なので、溝を勢い良く流れる水の音が静けさの中で際立っていた。顕彰碑への坂道を上り詰めると左にアズマヒガン桜の古木「藤路の桜」の大きな幹が見えてきた。

桜守佐藤良二君顕彰碑(35.4km) 4月29日 21時10分

顕彰碑は暗闇の中で何も見えなかったが、ライトで照らすと何とか見えた。撮影しようとしても暗闇の中なのでうまくファインダーの真ん中に映ってくれない。さくら道を語る時、この顕彰碑は主人公・佐藤良二さんのシンボルであり、絶対に外すことのできない場所だ。徐々に寒くなってきたので、半袖を上から重ね着する。古木の横にはこじんまりした屋根のあるバーキュー施設があった。満開の桜を見ながら、白鳥の町を眺めてのバーベキュー、良いなあ~と思う。

ここからは上って来た道を下り、途中から左斜めに進んで向小駄良方面に向かう。民宿の灯りが暖かい。あっという間に「向小駄良防災センター」の向かいの公園に辿り着いた。5年前の「さくら道交流会」で植えた2本の庄川桜の実生の育ち具合が気になる。特に生育が遅れている1本は枯れていないか、心配だった。育ち具合の良い奥の方は5ヶ月前と比べても葉が茂り、大きくなっていった。対して、手前の方は葉はなく、ほとんど成長が止まっているように思えたが、近寄って見ると新芽があちこちから出ていたので、この先はどんどん成長して行く





だろうと思うし、そうあって欲しいと願っている。

向小駄良の交差点を左折し、再び国道156号線に戻る。その先のローソンでひと休みする。塩ラーメンを買うと店員の女性から「どこまで行きなさんの？」と言われたので「一応、金沢まで」と言うと「ネイチャー走られたの?」「そんな実力ありませんよ」「気を付けて」、そんな会話のやり取りがあった。店の外でラーメンを食べながら、気温が9℃まで下がって来たのでウインドブレーカーを着て、手袋も着用。また、頭をすっきりさせるため、帽子を脱いでヘッドライトを外し、以降はハンドのライトのみで進むことにした。



ここからは緩い上り基調に変わる。しばらく歩くと走り出せたので、走れる間はできるだけ走るようにした。静寂の中、長良川の水の音だけが耳に入る。雪の中を走った昨年と比べて、如何にこの時期は走りやすいことか。どこかで水の補充をしようと探していると良いタイミングで見つかった。郡上八幡から五箇山までは水の宝庫なので、どこへ行ってもその辺りで冷たい水を汲むことができ有難い。

左側を道路と並行して長良川鉄道が走っているが、ところどころに駅のホームが見える。「白山長滝神社」の看板が見え、その先の右側に「道の駅・白鳥」が目に入って来た。トイレのために寄る。何台か車が止まっていて、ここで寝ようとしているのか、歯磨きしている男性から声を掛けられた。「今日はどこで泊まれるのですか?」「今夜は寝ないで進みます」「大丈夫なんですか?」「慣れていきますから、どこでもほとんど同じような会話になってしまう。



走ったり、歩いたりしながら、長良川鉄道の終点「北濃駅」前を22時30分に通過、徐々に気温が下がっているのが体感できる。歩いた分、時間の余裕がなくなったので、旧道への

回り道はせず近道の国道を進むことにした。気温は8℃、時折、風の通り道で冷たい風が吹くこともあった。走っている車は乗用車が多いが、時折、大型トラックがスピードを上げて通り過ぎることもあった。先に点滅信号が見えてから、緩い上り坂が長く感じる。明るい「高鷲商工会館」前でひと休み。その横に「寿し幸」という寿司屋ができており、23時を過ぎているのにまだ営業していたのには驚いた。この辺りに寿司屋は似合わない気もするし、何よりも飲酒運転にならないのか?。



この先も右折して高鷲の旧道に迂回せず、そのまま国道を真っ直ぐに進むことにした。ここからはきつい上りになるが、だいぶ元気が戻って走れるようになっていた。「穴洞橋」で旧道と合流し、その先はきつい上りが続くので、歩きが中心だ。はるか頭上から下って来る車のライトが見えても、大きく迂回するカーブが続くので、車はなかなか現れず、「あそこまで上らないと駄目なのか」と何度も思う。ふと下を見ると高鷲の家々から電灯の明るさというのだろうか、温もりのある光にうっとりさせられた。これは都会では絶対に見られない光景だった。雲ひとつない空を眺めると無数の星の数に圧倒され、時折聞こえるフクロウの鳴き声は親しみさえ感じさせてくれた。

昨年11月の大雪の光景と比較しながら、ただただ前に進む。西洞の集落手前の民宿が点在するところは道路幅が広く、歩道も広い。歩道の外にあるガードは横に3段のポールが付けてあるが、一番上はどこも縦方向に大きく折れ曲がっていた。何故なのか、不思議に思えた。自分なりの結論は雪の重みでこんなにも折れ曲がったのではないか。この辺りの積雪はガードの高さくらいになるのだろう。豪雪地帯の凄さを目にした思いだ。

わずかに下ったところに「ダイナランドスキー場」の入口が見えた。0時を回り、30日に変わっていた。この先は一旦、道幅が狭くなった後、また広がって急な上りになる。その先のヘアピンカーブでは大きな字で「銀白荘」と壁に書かれた民宿が現れる。ここはSの字のヘアピンカーブになっているが、前から車が勢いよく音を立てて下って来るのでちょっと怖くなる。蛭ヶ野からの対向車は少なく、白鳥から上って来るのは半数くらいが大型トラックなので、気を遣う。



「牧歌の里」の明るい看板が目にとまった。気温は3℃まで下がっている。そんなにも下がらないかと思っていたが、放射冷却の影響がじわじわと下がり始めていた。オレンジ色の明るい外灯が先に見え始めた。「道の駅・大日岳」だ。夕暮れのように明るい。ここは左右に大きな駐車場があり、山の中とは思えないくらい広い。ここからは下りが続くので、しばらくは走れた。左に行けば「高鷲スノーパーク」に行ける。この辺りから当分の間、山の斜面からはゴソゴソという音がした。大きな音がすると一瞬ビクッとすることもあった。「駒ヶ滝」までが下りで、そこからは上りに変わるが、もう分水嶺までは1km弱だ。

ひるがの分水嶺(56.7km)

4月30日

0時54分

外灯の下に「分水嶺公園」の看板が見え、やっとの思いで「蛭ヶ野峠」に辿り着いた。「分水嶺公園」、「太平洋、日本海」の石碑を確認する。11月は60cmもの積雪があり、雪をかき分けながらの確認だったのを思い出す。この先は下り基調、庄川櫻には3時過ぎに着くだろう。本当は明るくなってから、満開の庄川櫻を見たいと思っていたが、そんな余裕のない状態だったし、以降の時間も全く読めない。それがウルトラ、ましてやひとり旅だから。蛭ヶ野高原は静まりかえっているが、まだ屋内が明るい家も時折見受けられた。ここは風の通り道になるので、冷たい向かい風で一気に寒さが増し、ロングタイツだけで十分心配になる。



その先にコンビニの看板が見える。以前はタイムリーだったが、今はデイリーヤマザキに変わっていた。白川郷もデイリーヤマザキに変わっていたし、大和辺りにあったタイムリーも変わっていた。このコンビニで腹ごしらえしておかないと次は40km先の白川郷まで何も無い。この間がスタミナ温存面で大きなポイントになる。焼きおにぎりと豚骨ラーメンを買う。店の外で風を避けながら、配送用のプラスチックケースに座って食べる。ラーメンは喉に通りにくく、半分くらいしか食べられなかった。店の外には猫が一匹いて、近寄って来た。氷点下の店の外で暮らしているとは何とも強い猫だ。寒さに強い点では私と共通するようで、何か親しみを感じる。残ったラーメンは猫に食べて貰おうとベンチの下に置いて、店を去った。その先の民家の軒先で湧き水を補給し、ロングタイツの上から、冷水を掛けてアイシングする。これは初めてのさくら道の時、T澤さんから聞いた「アイシングをしているから、みんなが走れなくなった今でも走れているんだ」と兼六園付近で聞いたのを何故か思い出したから。確かに良く効くと思う。

さくら道で一番気温が下がるのは郡上市から高山市へ入る付近だ。1時30分に通過すると気温は-1℃を示していた。湿気がなく、風が冷たいので体感温度は-5℃くらいに感じる。蛭ヶ野前後の気温表示は11月の厳寒

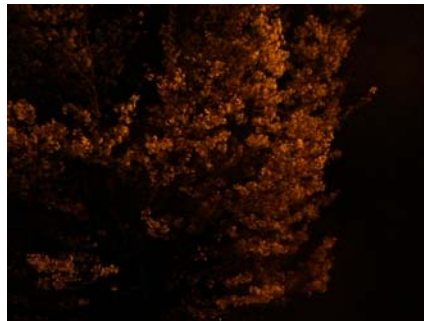


さくら道の時と全く同じだったのも不思議な縁に思う。しかし、同じ気温でも身体を感じ方はこんなにも違うものか。これからは長い下りが続くので、できる限り走り、時々歩くを繰り返した。数分に1台くらいの割合で車が下って来るが、7割は大型トラックで、コーナーが多いのにバンバン飛ばすので、場合によってはガードレールに寄り掛かることもあった。上って来る車は少なく、あっても乗用車ばかりだ。雪道での下りではオレンジ色



の外灯がとりわけ明るく思えたが、雪がないとそれほどでもなかった。この時、マンホールの蓋に気付き、写真を撮る。旧庄川村のもので一面桜の柄だった。

寂しい御手洗、滝ヶ野の集落を過ぎると「庄川であいの森」が見え、外灯の下にはやや散り始めた数本の桜の木姿もあった。「飛騨INFO庄川」で下りは終わる。その先の自販機で缶コーヒーを買い、隣に湧き水があったので、ここでもペットボトルに補給する。前は寒い中ではあったが、この付近からガス欠になったので、今回は水分補給をマメにしている分、水がよく減る。



「JRバス牧戸駅」着は2時31分、ベンチに座って温かい缶コーヒーを飲むとラーメンを吐いてしまった。確かに下りでも胃の重さは感じてはいたが、吐いたことによって、だいぶ楽になった。庄川桜までは6km弱、3時15分頃には到着できると思う。T字路を左折して御母衣ダム湖、庄川桜方面に向かう。ここからは庄川インター方面からの車も合流するので、夜中とはいえ車は多くなる。下りで走った疲れもあり、しばらくは歩く。左前方に明るい光が見えるが、岩瀬第1トンネルではないだろうか？。歩道がなくなると大型トラックが来る度に道路脇に寄って立ち止まった。

明るい外灯が見え、左に大きく曲がるカーブを越えると「岩瀬橋」だ。トラックが来ると危ないので頑張って走る。この先には「岩瀬トンネル」の1号から3号までであるが、道路幅が狭く、路面が荒れているので、特別注意が必要なトンネルだ。この3つのトンネルはそれぞれ形や柄が違うのが特徴だ。元気が出てきたので、足元は走りにくい



ができるだけ頑張って走るようにした。少し先の「ドライブイン御母衣湖」の奥まったところにある自販機に寄ってみた。温かいコーンスープがあれば飲みたいと思ったが、残念ながらなかったのでパスする。相変わらず大型トラックが猛スピードで追い抜いて行くが、路肩が狭いので、その都度立ち止まって避けた。身の危険を感じるほどだ。反面、白川郷方面からのすれ違う車はほとんどなかった。いくつかの橋を渡ると何回も通っている道なので、そろそろ庄川桜が近いのがわかる。そんな中、暗闇の中に庄川桜に着けた。

庄川桜(71.5km)

4月30日

3時18分

今週初めにはライトアップがあるとHPに載っていたが、もうその日も過ぎ、ましてや朝方。ライトアップ期間でも夜9時までだったので、満開の桜を見ることはできなかった。開化情報では咲いてから気温が下がったために散らなかったそうで、今日は見られる最後の日だった。この時期だけに外灯が点いていればと期待していたが、結

局前回と同じで真っ暗闇の中での庄川櫻しか見られなかった。それも致し方ない。LEDライトを照らして、わずかな明かりでピンクの花びらを見ることができた。写真を何とか撮れた程度だ。ただ、明るくても、暗くても奇跡の復活を遂げた生命力の庄川櫻には変わらない。とにかく天然記念物「妙蓮寺櫻」「色輪寺櫻」を今年も見られたことに感謝しなくては。



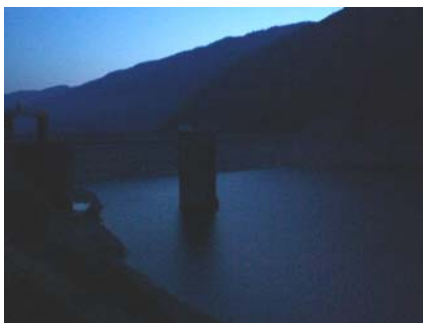
気温0℃、駐車場には1台の車もなかった。こんな時間に庄川櫻を見に来る人はいないだろう。先を急ぐ。4時を境にして、白川郷方面に向かう大

型トラックはなくなり、変わって乗用車が増え始めた。御母衣ダム湖沿いにぐるっ〜と回ると「尾神橋」が見えて来

た。前は凍結で最も気を遣った橋だが、今はそんな必要はない。尾神橋を渡り切ると「尾神1号トンネル」「尾神2号トンネル」と続く。共に道路幅が狭く、路面が粗いので、車が来れば立ち止まって避けた。しかし、古いトンネルは新しいトンネルにはない厳しい自然の歴史を感じさせてくれるものがある。



「福島保木トンネル(1106m)」は半分走り、半分歩いた。トンネルを出ると空が若干の青みを帯び初め、御母衣ダム湖は幻想的な雰囲気漂わせ始めていた。「福島第1トンネル」も古いトンネルで暗く、路面はかなり粗く、走るには相当辛いところだ。このトンネルを出てから間もなくすると、道路から逸れて御母衣ダム湖側を通ることになった。明るい時はいつも通るコースだ。御母衣ダム湖をじっくり眺めると上流の方は湖面から雲が覆うように出ており、感動の光景だった。雲海みたいで、大自然の神秘を見た思いだ。ただ、今年は雪が少なかった影響か、ダム湖の水位はかなり低く、砕石を積み上げたロックフィル式ダムが寂しそうに思えた。



横では工事作業員がこんな時間なのに作業している音がしていた。不思議だ。ダム側を通っているうちにダムの横まで来てしまっていた。変だなと思い、いつもコースのトンネルに戻れるところを過ぎてしまったようで、無理やり「福島第3トンネル」に戻った。薄暗かったのが、何故そうだったのか



は良くわからない。福島第3トンネルは天井から水も落ちていて、一番危険なトンネルだ。

御母衣ダム(79.2km)

4月30日

4時42分



福島第3トンネルを出て右を見ると様相が変わって工事現場があり、新しいトンネル工事が行われていた。新しいトンネルができるとは知っていたが、いつ完成かは知らない。今通って来たトンネルよりダム湖側に造られていたが、一体どこへ出るのか気になった。ここから、10%を超える急な下り坂のヘアピンカーブを進んで行くと「御母衣ダム」の全様が目の前に迫ってくる。V字谷に雄大な光景だ。ダムを管理する「電源開発」の施設内で庄川櫻の大移植の様子が映像で見られると聞く。

もう5時、だいぶ明るくなって来たが、まだまだ空はねずみ色だ。下り切ると一気に景色は変わり、大好きな牧の集落。ここに来ると独特のものを



感じる。静寂の中、腰を下ろすと目を瞑りたくなり、仰げば雪の白山が見え、じっとして物思いにふけっている方が良いでしょうにさせられる、そんな落ち着ける場所だ。私にとって、さくら道の中でも牧から御母衣が一番好きな場所だ。右側に「御母衣旅館」があり、こんな旅館で泊まってみたいと思わせてくれる重厚な外観だ。この桜は今が満開か、半分くらい散った状態だった。自販機に寄って栄養ドリンクを飲む。



前方には「白山」が見え始めた。今年も日本三名山のひとつ、白山を見ることができたことを嬉しく思う。御母衣にある国の重要文化財「遠山家」の前を通る。車が通らない時間帯なので、好きなように写真を撮れる。右側の庄川を見ると水がわずかしかなく、御母衣ダムの水が落とされていないからだろうと察するが、雪の影響もあるのだろう。「大白川橋」手前通過は5時20分、まだ気温は1℃と低く、かなり冷える。「白山登



山口」のバス停から山に入るところには“立山・乗鞍が人間公害で泣いている、白山国立公園を護ろう”、こんな看板が置かれてあった。平瀬温泉の旧道と新道に分かれ目に「大白川の湯・平瀬温泉」のモニュメントがある。夜だと文字が光って鮮やかなのに、明るい目立ちにくいモニュメントに思えた。

旧道はさくら道本来のコース、温泉街に入っていく。全く人気のない静かな朝だ。そんな中、水だけが勢い良く音を立てて、溝から溢れんばかりに流れている。平瀬は水の宝庫だ。足が疲れているので足湯に浸かろうと思った。2つ目の足湯「くろゆり荘」で浸かることにする。2年前に浸かった旅

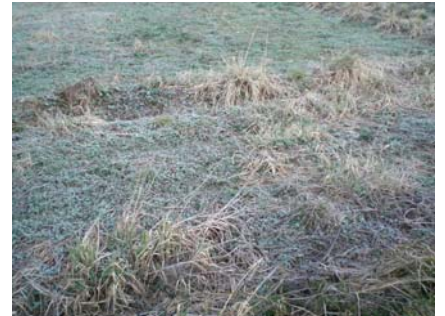


館だ。靴下を脱ぎ、ロングタイツを捲るとさすがに寒い。湯の中に足を浸けるとぬるま湯で30度もないくらいだった。しばらく辛抱して浸かっていたが、辛抱できずに上がって、先に進む。これでは何の効果もないではないか。その先に進むと庄川沿いに満開の桜があった。とても綺麗だ。



まだ先にも足湯があるので、別の旅館の足湯に入ることにした。「ふじや旅館」の前にあった足湯に足を浸けるとの凄い熱さでとても浸けられない状態。わずかに足を浸けて、すぐに上げるの動作を何回か繰り返して、先に進んだ。その先にもふたつの足湯が旅館の軒先にあった。ちょうど新道のこの辺りには「しらみずの湯」がある。昨秋は凍結で転倒し、頬に傷を負ったことを思い出し、あの時は本当に大変だったと振り返る。

朝6時を過ぎた。もう完全に朝だ。平瀬温泉のマンホールの蓋が目についた。平瀬温泉の特徴を表したなかなか味のあるマンホールの蓋だった。軒先の水道を開けさせて貰ってペットボトルに水を補給する。その先で新道と合流する。右側を流れる庄川沿いにはほとんどころ桜の木があり、どれも綺麗な花が咲いていた。ふと脇を見ると霜が降りていた。この付近はいつ頃までこんな霜風景が続くのだろうか？。先を進むに従い、両サイドの山々の斜面の新緑が鮮やかになってきた。「新平瀬トンネル」を通過す



る。このトンネルは昼でもトンネル内の明かりが少なく、足元さえ見えないところも多い非常に危険なトンネルだ。そして、間もなく陽も差し始め、風景がより鮮やかに映り始める。白山が綺麗だ。見とれながら進む。

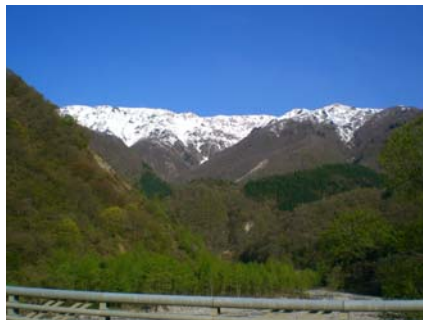
庄川沿いを更に白川郷を目指して進むが、ひと晩全く目も瞑っていないので、少し眠気が始まってきた。写真



を撮っていても中途半端な時間帯なので、オートの出出がうまく調整されないみたいで、変な色の写真が多い。車が少ないので、右に左に自由に動けて助かる。以前からここを通る度に「帰雲城跡」という看板が気になっていたのので寄ってみた。これは「かえりくもじょう」と呼ばれて、武将内ヶ島一族が築城した帰雲城は、天正13年(1585年)旧11月29日、東海・北陸・近畿に及ぶ広範の地域を襲ったM7.8という巨大地震によって、帰雲山は大崩壊し、300戸余り、1500人の城下町が一瞬にして土砂に埋まり、その土砂の下にはかなりの金や財宝が埋まっているとの伝説から、幻の帰雲城と呼ばれているとのこと。これでひとつ、賢くなれた！。



7時近くになって、空も青くなり、白山も新緑もより鮮やかに見えてきた。平瀬温泉では少ないと思っていた庄川の水嵩も普通に思っていたように思う。「野谷橋」を渡りながら、白山を撮る。ここからの景色が一番白山が映えて見えるところだ。ここでウインドブレーカーと手袋を脱いで、2本目の栄養ドリンクを飲む。右側に「鳩谷ダム湖」があるが、林の中を進むような感じになる場所だ。ただ、路肩が狭いので車が通ると怖い。左の石垣の上に桜と濃いポタン色の梅だろうか？、桜だろうか？、鮮やかに咲いていて、立ち止まって眺める。右に「鳩谷ダム」が見えて来た。1ヶ所から水を放流していた。ここからは長くて急な下りが続く。洞門を越えると橋が見



え、渡ったところにトイレがある。ここで長袖、ロングタイツを脱ぎ、半袖、ランパンの軽装になる。気温は5、6°Cだと思うが、この方が気持ち良い。前回は夜中に通ったのでこんな錯覚をしていた。

ー橋を渡ると公衆トイレと食事処があり、合掌集落との分岐があるはずが、橋のイメージが違い、そして公衆トイレもわからなかった。何回も通っていながら、荻町トンネルが真正面にあったことに初めて気付くーT字路となっているところを右に進めば、合掌集落に行ける。ここには「白川郷合掌集落」の石碑がある。

白川郷分岐「合掌集落」(95.6km)

4月30日

7時46分



このT字路交差点内で斜めに1台の軽自動車が止まっていた。車が来れば当たるような位置だった。しかもドライバーは知らん振りして乗っている。人の姿のない観光地の8時前とはいえ、あまりにも常識外の行動に注意しようかなと思ったが、気が引けてしまい、さっさと先を急いだ。明るい白川郷を見られるのは3年振りのことだ。今まで気付かなかったが、右を見ると小さな水田が一面にあり、緩い段差の棚田のように見える。観光地としての合掌集落だけが目に入る白川郷だが、本来は山深い、冬は雪深い農村地帯の住処が雪に強く、暖かく、涼しい合掌造りの家々だったことが、原点なんだろうと感じた。



遠くにあった三角屋根の合掌造り民家が近づいて来ると「白川郷に着けたんや！」と思える瞬間だ。軒先の花壇に植えられている色とりどりの花や鉢植えの花、桜の花、山々の新緑のコントラストが、より合掌造り民家を鮮やかに映し出している。合掌造りの民家の合間から、朝支度の煙が上がっていたが、ここは煙さえも風景の一部になっていまい霧囲気がある。庄川には吊り橋が掛かっている、観光客が早朝から渡っていた。この橋は「であい橋」というようだ。この辺りが白川郷中心部の荻町だ。河原が公園のようになっていて、遠くには鮮やか過ぎる「白山」が見えていた。素晴らしい景観だ。



白川郷のマンホールの蓋を撮った。なかなか味のある柄だと思う。合掌集落内のメイン通りを進む。早朝から気持ち良い空気を吸いに散策している観光客の姿が結構あった。前回は夜で何も見えなかったが、一部の民家の軒先をしっかりと見ていたので、明るいイメージが違って見える。まだ店は開いていないが、「飛騨牛串焼き」の文字が目に入る。マラニックをしていると何故か肉が恋しくなる。どうしてなんだろう？。



白山はあちこちから見る事ができた。どこも鯉のぼりが上がっていて、合掌造りと鯉のぼりはマッチし、華やかだ。国の重要文化財「和田家」の前は逆光でカメラ撮りが難かった。ちょうどその向かいに日帰り入浴できる「白川郷の湯」があったようだ。2003年さくら道ではタマゴンさんは入浴されたところだ。



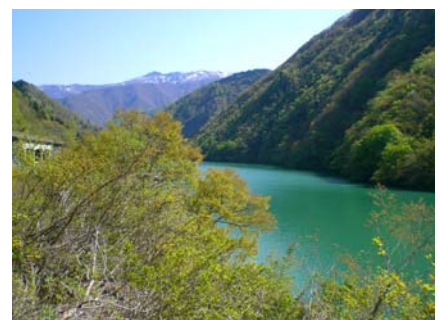
「白川橋」を渡った先にはデリーヤマザキがあるので入った。他府県ナンバーの車が次々と入ってくる。結構、関東ナンバーが多いようだ。ここも、以前はタイムリーだった。マス寿司のおにぎりを買って、持参の缶詰の焼肉をおかずにして食べた。そして、イブAを2錠飲んで、足底にマメができそうな痛み、外反母趾の痛み、太股根元の足の痛みなどに効いてくれたら嬉しいのだが。店員は前回話した人とは違うので、さくら道の話はしなかった。

国道156号線を渡り、旧道を進むと勢いよく流れる水の音がし、溝から溢れんばかりに流れていた。この通りに白い建物の「白川村役場」があった。市町村合併が進む中、白川村は未だ昔のままである。どうして何だろうか？。自民党衆議院議員でテレビによく映る平沢勝栄氏はここ白川村の出身だった。そうこうしているうちに道の駅「白川郷」に到着。今まで気付かなかったが、ここは合掌造り風の建物だった。店内ではこの先で食べられそうなものを探すが、その手のものは置いてなかった。そこそこの車が停まっていたが、関東ナンバーが半分くらいで、関西ナンバーはほとんどなかった。この先、当分水がないので、水舟から水をペットボトルに注ぐ。ここからも白山は綺麗に見えた。道路を隔てた向かい側には「飯島八幡神社」がある。

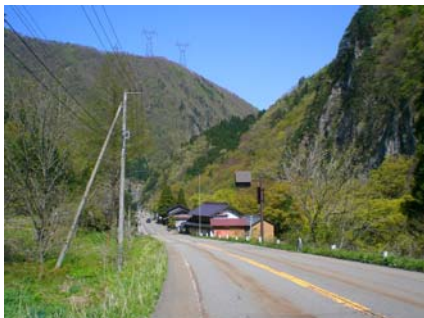


道の駅「白川郷」を後にして、いよいよトンネルと橋群の飛越峡合掌ラインに入っていく。コバルトブルーの庄川が鮮やかなコースだ。道の駅「白川郷」を出ていきなり見えるのが、「飯島トンネル(1873m)」で例の如く、車道の右側を走る。車のゴォーという音が聞こえるとトンネルに入ったのがわかるので、ライトが見えて50mほど手前に来れば歩道に上がるを繰り返す。過去と比べて、格段車の数は多く、富山方面より、白川郷方面向きの車が多い。歩道は結構、雪解け水が砂ボコリと混じって、滑りやすくなっている所が多いので、足元には十分気を付ける。このトンネルは全て走れた。外が暑くなっていくので、トンネル内や洞門が続くことはコンクリートの冷やかさも有り、涼しくて助かる。

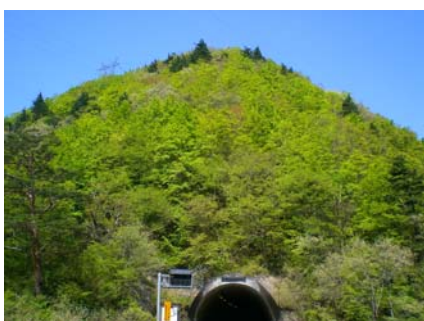
洞門のコンクリート柱越しに鮮やかなコバルトブルーの庄川のせせら



ぎが淡い新緑の中、とても鮮やかで目の保養となる。とても川とは思えず、大きな池のようにさえ見えてしまう。V字谷が本当に綺麗で、このまま座って眺めていたいほどで、とても癒され、この静けさの中で川面を眺めていると時間が経つのを忘れてしまいそうな気分になる。次は「新内戸トンネル(1322m)」,ここは半分走って、半分歩いた。このトンネルはいつも、雪解け水が落ちないので、歩道は綺麗だ。



新内戸トンネルを出てすぐが「椿原橋」。ひっそりとした山間の国道脇にはひなびた椿原の集落があり、そこを越えるとまた洞門が続く。椿原第一洞門から椿原第六洞門まで、次々と洞門が続く。10時前になり、陽射しは強いが、山なので空気は乾いて涼しい。冷水を見つけると太股、膝、脹ら脛に掛けてアイシングする。庄川は水嵩が減って、流れが速くなっていた。この辺りの民家に住んでいる人達の日常はどんな生活をされているのか興味深い。「飛越峡合掌ライン」の表示があり、この先は橋を渡る度に岐阜県と富山県が交互することになる。

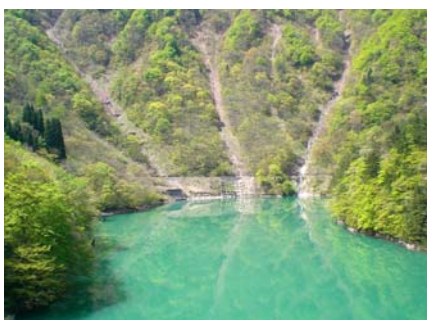


「加須良トンネル(1038m)」が目の前に迫って来るとトンネル上の山の新緑が陽に光って、飛びきり明るい黄緑色に輝いていた。トンネルの上の山をじっくり見たのは初めてだ。右側には旧道と橋が見える。トンネルができる前はここが通り道だったのだろう。このような古い橋の方が、飛越峡合掌ラインには似合う。加須良トンネル内はポトポト水が落ち、歩道は部分的に滑りやすかった。ここも結構走れた。時間の経過と共に車の数は



どんどん増えて行くが、ストレスを感じるほどではない。

加須良トンネルを出ると真っ青な空に合掌造りをイメージした「合掌大橋」と遠くには雪を被った山が現れ、見事なコントラストを描いている。7年前のさくら道ウルトラだったのだろうか、この橋を渡ったところで神奈川県「チームくろひげ」の方がシートが飛ぶような風の強い中、エイドをして下さり、缶ビールを頂いたのを思い出す。この辺りの山は雪解け水が急斜面を流れ落ちてくる場所のようで、その跡がはっきりと形取られていた。ややこしいが、合掌大橋に一步入ってから、橋の途中までは富山県になる。右前方には「成出ダム」が見える。



その先の「飛越橋」手前で再び富山県に替わり、五箇山「赤かぶの里」の看板があった。五箇山といえば「五箇山豆腐」のイメージしかなかったが、赤かぶも名産物のようだ。すぐ先の「成出橋」を渡るとまた岐阜県に変わり、

白川村小白川となる。集落手前で1台の路線バスとすれ違った。バスの行き先は「白川郷荻町」となっていて、高岡発だった。富山・高岡と岐阜・白川郷間に路線バスがあったことをこの時に初めて知った。民家が2軒くらいしかないところにバス停があり、時刻を見ると3時間に1本しかないバスが、あと20分くらいすれば高岡行きがやって来る。見なければ知らなかったこ



とだが、それを知ってしまった。30分すればささら館を越えて岩崎家まで行ける。岩崎家の前にバス停があることを知っていたので、心はそっちに行ってしまうていた。



その後、長い坂があり、その先には小白川の集落、「小白川橋」がある。右側の庄川は川面すれすれまで新緑が生え茂り、或いは浸かっていた。左には前回、世話になった「渚バス停」があり、雪の中では重苦しさを感じたのに、この季節に見るバス停は全然違っていた。温かみがあって、これがバス停かと思うほどだった。

青い欄干の長い「火の川橋」手前からは路面が粗くなり、走りにくいが、バスに乗れるのが嬉しくなり、どんどん元気が出始める。何とも皮肉だ。「渚橋」を渡ると道の駅はすぐそこだ。缶ビールを飲みながら、バスに乗ろうと思いは始める。



道の駅「ささら館」(113.1km)

4月30日

10時47分



道の駅・上平「ささら館」は観光バスが何台も止まっていて、賑やかだった。中に入って、ビールが売っていないか探すがわからない。レストランの人に聞くと「2Fで取ってきましょうか」と言われたが、汚い格好の者にそこまでして貰うのは失礼と思いお断りし、外に湧き水があったのでペットボトルに補給していると、中年の女性から「その水飲んでも大丈夫ですか？」と尋ねられたが、「私は大丈夫だと思って飲みますが、実際のところはちょっと・・・」という感じで応えた。道中はずっとそんな感じで水を飲んできたし、この辺は水処なので大丈夫のはずだが、うかつには言えないというのが本音だ。

ささら館を後にすると、バスの到着時刻まであと5分くらいになっていた。このバスは路線区間は長い、コミュ

ささら館を後にすると、バスの到着時刻まであと5分くらいになっていた。このバスは路線区間は長い、コミュ

ニティーバスのように民家があればバス停があるというくらい多くのバス停がある。

山寺の「行徳寺」はいつも道路からしか見ていなかったもので、今回は中の本堂も見たが、重みを感じる造りだった。横には合掌造りの住まいもあった。その右側には国の重要文化財「岩崎家」が悠然と立っている。個人的だが、この岩崎家だけは遠山家、和田家、村上家とは違い、周りの雰囲気もあってか風格の違いを感じてならない。いつ見ても鯉のぼりがより際立っているように思える。10人くらいの観光客の姿もあった。



バスが到着するまで数分あったので、向かいの店に入ると缶ビールが売っていたので買う。つまみはなかったが、店の人が飴でもと2個渡してくれた。ここを走っているのは「加越能バス」で西赤尾バス停は10時59分だった。缶ビールを飲みながら待っていると、若干遅れてバスは到着。とりあえず、相倉合掌集落口まで乗ることにした。

バスに乗りながら、「民謡歩道」「管沼合掌集落」「くろば温泉」「上梨・こきりこの里」「村上家」「上梨トンネル」「下梨」など外の風景を眺める。バスは速過ぎて、記憶に留めることができない。やはりバスでは線にすることは難しいと感じる。何故、このポイントでバスに乗ったか、それは五箇山インター付近は歩道がポコポコしていて歩き難く、ストレスを感じるからだ。夜中なら車道を進めるが、昼は車が多く、とても車道を進めることはできない場所だ。このバスには数人が乗られていて、外国人カップルも相倉合掌集落口で降りられた。料金は680円。ここから先は前回通っているので、イメージできる。数百メートル歩いて、新緑の「相倉合掌集落」を散策する。以外と駐車場に車が少なく、管沼の半分程度しか観光客の姿はなかったのは予想外だった。

深い山々に囲まれた集落を見回すと石を積み上げた棚田の畦に生える緑の草が鮮やかだ。この合掌集落は観光地化されていない普通の農家集落がたまたま合掌造りだった、そんな感じに思える。道も真っ直ぐではなく、自然なままで、そこが相倉の良いところではないだろうか。見るところは少ないが、ポオ～としているのは良いところだと思う。1世紀前の農村の姿がここにはあるように思えてならない。ただ、雪の相倉合掌集落のイメージが強過ぎて、物足りなさはある。

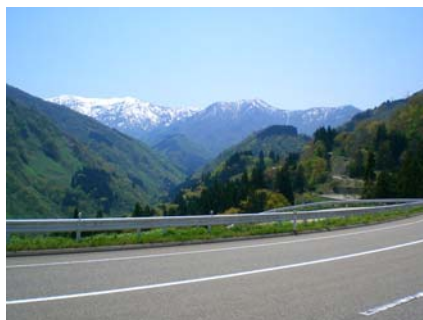


白川郷で食べたかった「飛騨牛串焼き」を店で聞いてみると、ここにはないと言われた。よく考えてみると白川





郷は飛騨地方で岐阜県だ。ここは富山県に入っている。飛騨ではないので、飛騨牛串焼きなどあるはずがなかった。我ながら、ゴツチャにしていたようだ。食べる処も少なく、軽食程度しかなかったので、入口の店でアイスクリームを買い、店の人と世間話をする。ここでもネイチャーの話が出た。さくら道を走ること=ネイチャーランのイメージが地元には根強いように思う。

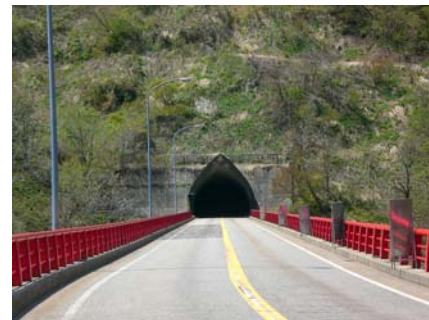


その後、相倉合掌集落口から、さくら道のコースに戻る。ちょうど正午12時だ。楽しめた分、急坂はそれほど応えない。空は真っ青で雪を被った遠くの山々の羨望が鮮やかだ。車の数は今までのこの時期と比べると倍はあるだろう。民家の軒先に



植えてある色とりどりのチューリップの花が鮮やかだ。そういえば富山のチューリップは有名だ。坂を上り切るとトイレに寄って、ひと休みする。3kmあまりで200m上がったことになる。鉄デリーを撮取、持参したものはこれが最後だ。

「梨谷トンネル(812m)」を通り過ぎるとカーブの先に赤の欄干の「梨谷大橋」が現れる。左に行けば「たいらスキー場」という大きな看板がある。鮮やかな新緑の中に赤の映える梨谷大橋だ。橋桁からの写真を撮ると大自然を繋いでいる橋という気がして、ここからのアングルが一番迫力があって好きだ。ここを渡る時は足を引っ張られそうで、絶対に端には寄れない。



五箇山トンネル入口(118.3km)

4月30日

12時51分

そして、橋を渡った先には名物「五箇山トンネル(3072m)」がある。鳥のくちばしのような形の入口は威圧感があり、吸い込まれるような気分させる。今まで楽していたので、できるだけ最後まで走り切ろうと決意して、入って行く。例によって右側車線を走り、車の音が聞こえ、ライトが近づいて来れば、歩道に乗り上げるを繰り返す。歩道は水と泥が混じって滑り易くなっている箇所が頻繁にあったので、足元には細心の注意を払った。場合によっては歩道に上がらず、左側車線に寄ることもあった。今年車の数は例年の3倍くらい多かった。トンネル内には入口側と出口側、それぞれの距離表示がされているが、出口側の距離がどんどん減っていくと嬉しくなる。出口には22分くらいで辿り着けたが、走った分、歩くより8分は早い。

出口に近づくとき若干カーブしているので、ここは気を付けないといけない。出口は入口ほどの威圧感はない。トンネルを出ると辺りは一変し、五箇山までの鋭い景観から、ゆったりとした景観に変わる。冬になれば



更にその格差が広がるのだろう。ここからは4kmで330mの長い下りが待っている。下りになってからは思うように走れなくなっていた。路面が粗いため、太股、膝、足にかなりのダメージを感じる。足底のママの具合も気になる。走っては止まり、歩き、また走るを繰り返す。山肌の木々を見ていると針葉樹の色は濃く、広葉樹の色は薄い感じに思えた。眼下には旧道らしき道が見えているが、曲がりくねった坂が多く、昔の人は厳しい環境で生活されていたのだと感心する。

徐々に城端の町の様子が大きくなり、下りも間もなく終わる。この辺りから、かなりグロッキーになり、歩き始める。下界の暑さが応えて、疲れも含めて下りで走れなくなったのだろう。下りで走れないのは本当に辛い。もう限界ではないだろうか？、そんな気持ちになる。城端駅まで行けば、JRで福光までワープしようという思いが坂を下っている途中からあった。下り切ると歩いたり、走ったりを繰り返すが、かなりバテバテになっていた。

「新打尾橋」を渡ると大鋸屋の集落。信号の少し手前にはサントリーの自販機があったので、缶コーヒーボタンを押すとCCレモンが出た。間違ったのかと思ったが、管理されていると思われる商店のおばあさんに言うと、おばあさんも硬貨を入れて確かめられたが、同じくCCレモンが出た。「私とこは置いているだけで、メーカーの人が入れ間違っただろうから、今度来られたら言うときます。これから、金沢目指されるんですか。気を付けて」と言って下さった。この店の前で2004年春にひとりさくら道をした時、滋賀・八日市出身のおばあさんとわずかな



会話をしたが、あの時のおばあさんとは違うように思えた。5年の歳月が流れているので、話し方のイメージだけが残っていて、風貌は蘇らないので、私自身が思い出せなかったのかもしれないが、そのことを話せば良かったと後悔した。

大鋸屋の交差点を越えて、しばらく進むとバスが気になり始める。高岡行きのバスは3時間に1本ある。相倉合掌集落口から、この間バスには追い抜かれていない。もう、そろそろバスが通ってもおかしくない時間ではないか。バス停はないのか？、そんな焦りに変わっていた。その時、城端駅まで行くことを忘れ、心はバスに乗ることに移っていた。大きな交差点を渡った先にバス停が見えた。城端中学前辺りで、時刻表を見ると5分も待てばバスは来る。大鋸屋から1kmほどの地点で14時15分頃、少し早めの時間にバスは来た。気分はウキウキで飛び乗った。走らなくても、歩かなくても良いと思えば、こんなにも乗り物とは便利で楽なものだとつくづく思う。

「越中の小京都」城端の町をバスはあつという間に通過し、「城端橋」を渡って「城端駅」に着いた。ここで時間調整のため、5分停車すること。駅の改札を通過してホームを見ると長閑だ。田園地帯にある駅の良さを感じる。その後、バスは道路を右折し、南砺中央病院経由で「越中山田」駅を巡回し、再びさくら道のコースに戻る。「松島燃糸福光工場」が見えたので、元に戻ったことが確認できた。しかし、一元乗客である私にバスの路線区などわかるはずがない。いつの間にかコースから逸れ、「小矢部川」を渡ったので、慌てて乗車ボタンを押す。福光天神町というバス停で降りて、近くの店で「福光橋」を教えて貰うと歩いてすぐそこで、バス代は340円だった。



福光橋(126.7km)

4月30日

14時41分

福光橋まで来れば、ここはさくら道のコースだ。波多パパ&ママの店に向かうために商店街を歩いていると目の前をJRバスが通り過ぎ、行き先は「金沢駅」になっていた。目が点になった。福光から金沢までは車で行けば遠くはない。しかし、バスがあるとは全く知らなかった。福光からは城端線で高岡に出て、北陸本線で金沢に向かうしかないとばかり思っていた。よくよく振り返ってコース地図を見れば、バス停のマークもあったが、いつもさくら道では夜中なので、バスがあったとしても関係のない時間帯だった。



バス停で時刻を見ると17時半頃に金沢行きのバスがある。「これだ！」と思った。わずかに時間がずれて、バスを見なかったら、金沢まで自分の足で行くつもりをしていた。金沢ゆめのゆに0時までには着きたいとの思いがあったので、森本10時なら電車があるかもしれない。何とかそれまでには、そんな思いも全てバスを見てしまったことで吹っ飛んでしまっていた。何と意志の弱いことか。今までの私のさくら道は意志の強さが前に進ませてくれていたと思っていたのだが、体力減退は心の変化にまで影響していることをまざまざと見せつけられた。波多パパ&ママに会うためにバイパス沿いにある「楽蔵グリーンモール福光」に向かう。



到着すると、白川郷から食事らしいものは何も食べていなかったもので、「にぎり寿司とそばセット」弁当を買ってベンチに座って食べるが、少し喉に通りにくかった。楽をしたので体力はそんなにも消耗していないと思っていたが、やはり疲れているのだろう。そして、波多パパ&ママのお店に伺う。波多パパ&ママは息子さんの結婚式を間近に控え、何かと忙しそうに見えた。お店にはお客さんがいたので、ママは対応されていた。温かいお茶を頂きながら、パパと世間話をする。ネイチャーランの日、還暦行事で福光では一番大きな神社の祭りに参加し、神輿を担がれたこと。その間、ママは移動しながら労うために出迎えをされたこと。体力の低下を身に染みて感じる。ダブルさんは手術をしながらもネイチャーで復活され、改めて

凄と思ったこと。このGWIにさくら道を走られる方々のこと。その中で私が一番先にお店を訪れたことなど、30分あまりいろいろな話をする事ができた。

店外で波多パパ&ママに送られて、道の駅に向かう。道中にあったファミリーマートで500mlの缶ビールを買う。バスの時刻を確認すると17時28分で、あと1時間ほどあった。道の駅「なんと一福茶屋」では缶ビールを飲み



ながら、休憩。ビールのアテになるようなものは売っていなかった。足の手入れをしようと靴下を脱ぐと、道中で痛かった足底が嘘のように肉刺は何もなく、信じられないほどダメージはなかった。パンフレットなどを見ながら時間を潰す。枸杞さんには走ることを連絡しており、もしこの先のコース上に向かわれていると迷惑を掛けることになるので、バスの人になった旨をメールにて連絡する。外の芝生のところに「瞞着川版画巻・棟方志功」という表示があり、法林寺歴史街道というところには棟方志功の作品があると書かれていた。彫刻家・棟方志功が生前、一心不乱で版に目が触れるほどの距離で版画を彫る姿はとても印象的だったのを思い出す。

バスの時間が来たので、すぐ隣のバス停で待っていると金沢駅行きのJRバスがやって来た。数人の乗客が乗っていた。「華山温泉」を右に見ながら進む。そのうちにウトウトして眠っていた。目が覚めた時、県境辺りだった。また、すぐに爆睡に入った。今度、目が覚めた時は森本で、その後は兼六園方面から、金沢駅東口に向かった。走っている道中で必要な千円札数枚を小出ししていたが、小出しの千円札がなくなり、財布を見ると5千円札しかなかった。運転手に金沢駅に着く前に「両替できませんか？」と尋ねると「千円札は持ち合わせがない。何方か両替して下さる方いませんか？」と運転手は声を上げたが、誰もいなかった。そして、終点金沢駅東口には福光から40分くらいで到着、私は最後に降りることにした。料金は960円だ。

運転手に「バスに乗る時は千円札に両替して乗って貰わないと困る。今回は仕方ないから、あるだけの小銭を出して貰いたい」と言われ、1円玉数個を含めた350円ほどを出してバスから降りた。この運転手が変わるなあ〜と思ったのは、絶対バスに乗る時に乗客は千円札を持っているとは限らないはず。そういう時のために自分の財布の中には1万円分くらいの両替できる千円札を持っていても何も損はしないはず。完全に「乗せてやっている」と言う感じの言い方だった。自分を正当化するつもりはないが、正直呆れた。滅多にバスに乗らない人間はこのようにことに気付かないし、ましてや今回は徹夜で頭もボケている。乗ったバスもJRバス、通ったコースも名金線の一部ではないか。さくら道を走っていたわしは佐藤良二さんと、この運転手の態度がだぶり、変な気持ちになった。

金沢駅東口は初めてだったので、何故か勝手が違う感じがした。駅の真正面には「鼓門(つづみもん)」という木製の巨大な門があったが、駅とマッチせず、何か違和感を感じた。また、デジタル式水時計もあり、水の流れて時計になったり、「いいね金沢」と表示されたりしていた。駅構内を横断し、西口に向かうとあと3k



mくらいで、金沢ゆめのゆに着ける。昨年11月はここからが長かったが、今回は足のダメージもないので、楽に歩けた。途中ですき家に入って「ネギ玉丼」を注文、腹が減っていたので一気に食べられた。そして、前回の帰りに通った住宅街の先に「金沢ゆめのゆ」はあった。ちょうど着いたのは19時半だった。

金沢ゆめのゆ(126.7km)

4月30日

19時30分

金沢ゆめのゆにて

中に入ると前回と違って、混んでなかった。しかし、それ相応の人は入っている。2度目なのでどこに何があるかはわかる。前回同様にとりあえず、送っておいした荷物を手にし、フロントの隅で邪魔しないように汗をかいたものなどの整理をした。風呂に入る時などは荷物を預けないといけなから、フロント付近でないと具合が悪い。ひと通りの作業が終わると風呂で汗を流した。11月は浴室がムチャクチャ暑くて、髭を剃るにも汗でシェービングクリームが流れ落ち、冷水で汗を拭きながらだったが、今回は前回と比べ人が少なかったせいもあるのか、浴室内の温度はそれほどでもなく、汗



を流しながらの髭剃りではなくて助かった。

どうも走り終わった後は牛肉を食べたくないので、HPのメニューで見た竹の子と牛ロースのステーキとご飯、生ビールで、スポーツ新聞を見ながら自分自身の慰労会をした。その後は1Fのリクライニングに座ってテレビを見るが、暑くて汗が出るので、ここでは寝られそうにない。また2Fに戻って塩ラーメンを食べる。食べても食べても満腹感はない。寝る場所は前回同様に3階の一時休憩所にした。ここはトイレも近いし、畳の上でタオルケットを被り、真っ直ぐに足を伸ばして寝られるので一番快適だ。走った後は脱水の影響か、夜中に何度か起きてトイレに行った。ぐっすり寝られ、5時半頃には一旦目が覚めたが、朝食の時間まではうつらうつらして時間を過ごした。

6時半頃から、いろいろな風呂を楽しみながら長目の朝風呂に浸かった後は、新聞を見ながら、ゆっくりモーニングを食べる。10時チェックアウトなので、それまでの時間はブログの下書きをモバイルで打った。金沢ゆめのゆを出たのは10時過ぎになっていた。

帰路

2回目なので、藤江バス停もわかっている。前回と比べるとバスは空いていたので、早く到着したように思えた。中橋バス停で下車し、金沢駅西口前に向かう。とりあえずは駅の横にある「アパホテル」の喫茶コーナーで、今回のさくら道に状況報告を書くことにした。前回は無線LANが繋がらなかったが、今回はすんなり繋がってくれたので助かった。コンセントを利用するには端のテーブルに座らないといけないが、すでに女性2人の先客がいて、話すのに夢中らしく、いつになれば空けてくれるか気掛かりでならなかった。こちらも自分勝手な充電の問題だが・・・普通の4倍くらいの量が入る大きなマグカップのコーヒーは時間を掛けて、ゆっくり飲むことができた。1時間半くらい経った頃だろうか、待ちに待ったその場所が空いたので席を移す。あと30分もこのままだったら、バッテリー切れになっていたことだろう。

結局、昼食のことさえ忘れて、11時前から13時半頃までネットしていた。15時金沢発の各停電車で帰るので、時間をもて余すくらいだった。駅構内の土産店で何を買って帰ろうか迷った後、食べたい物もあったが、贅沢できないので安い店を探すが、なかなか見つからない。地下を通過して、東口側に向かうとだだっ広いだけの空間があり、公金、税金の無駄遣いがここでも目に付いた。その先のビルの地下にラーメン屋があったので、餃子定食を食べる。塩ラーメン、餃子、ご飯で600円だった。

再び、金沢駅に戻り、15時発の敦賀行きに乗る。社内は平日ということもあり、ガラガラで向かい合わせの4席を独り占めできた。外の景色を眺めたり、眠ったり、ゴロゴロしたりを繰り返して、途中でサンダーバードの待ち合わせがあれば、自販機で缶コーヒーを買いに走ったりして、敦賀に着いたのは17時35分。ここからは米原回りの新快速に乗り継ぎがあった。通常の新快速は湖西線回りだが、たまに米原回りもある。湖西線回りで北陸に行くのと米原回りで北陸に行くのとでは料金は300円ほど違うので、米原回りの方が得するのだ。金沢から約4時間半掛けて家に到着。いろいろあったが、無事に3日間の楽しいさくら道を終えることができた。

8回目のさくら道を終えて

昨年11月は「雪の厳寒さくら道」だったが、5ヶ月後の「春のさくら道」はあまりにも違っていた。冬が厳しい地方の春は光輝いて見えた。冬を走ったからこそ、春の暖かみがわかる。今回感じたことは今までの自分とは違うということだった。「2006年それぞれのさくら道」までは走っていたし、精神的にも、肉体的にもタフな部分があった。しかし、平瀬で止めて高山観光に向かった2007年から、前に進もうとする推進力の極端な衰えが目に見えて表れてきたことを改めて感じた。身体が動いてくれないことによって精神力まで弱体化しているのだ。わかってはいたが、それを否定し続ける自分があった。それを今回証明してくれたように思う。同時に、これからの走ることに對する自分自身の考えも変えなくてはならなかったように思う。

走ることは別に新緑のさくら道は素晴らしかった。満開の庄川櫻は闇の中で見られなかったのは残念だったが、以降は素晴らしい景観で、今までで一番目に焼き付くさくら道だったと思えた。ただ、その後に海宝さん達とさくら道を走られた方々の写真を見るとみんなでワイワイ言いながら走ることは楽しそうだなあ〜と強く感じた。ひとりりで走るとそこに空しさもある。これから先、仲間と一緒に走れるかどうかもわからないので、より一層そう思うのかもしれない。

けれども、私にとってさくら道が永遠であることに何ら変わりはない。このコースは飲食が不自由な代わりに、パノラマが素晴らしいので、景色を見て腹を膨らませるコースと言い換えられる。ここにいると安心できることがいっぱいあるのは自然の大きさではないだろうか。小さな悩み事など全てを包み込んでくれるような気がする。

年々大会参加の数が減る一方でさくら道への思いは強くなっている。心の中ではいつまでも永遠であっても、この愛おしくてやまない、さくら道をいつまで走れるのだろうか？。そんなことを思うようになった今日この頃である。

そして、2010年GW、待望のさくら道ウルトラが復活する

8月、思いも掛けなかった情報が入った。2010年GWにさくら道270kmウルトラマラソンが、「さくら道270kmウルトラ遠足」と名を代えて復活するという。海宝さんとmasaさんが事務局とのこと。スタートは4月30日と決まっており、スタートは「JR東海バス名古屋営業所」、ゴールは「金沢ゆめのゆ」で参加者は200人。私がさくら道を走っていた頃、海宝さんとその仲間達もさくら道を走られ、masaさんご夫婦はサポートされた。ゆのさんや香峰さんも一部参加された。これがさくら道復活のきっかけになったのかもしれない。

さくら道ウルトラが2003年、10年間の大会に幕を閉じたが、私も含めてさくら道を多くの人がグループで、或いはひとりで走り続けられた。これは大会が復活する願いを込めての部分と、さくら道ウルトラが行われようと思われまいと、さくら道を走ること何ら変わらないという部分があったと思う。

ひとりで走るようになってから、前に進むとする推進力は弱い、反面いっぱいさくら道を知り得る、楽しめるという、大会では絶対に味わうことのできない楽しみができた。波多パパ&ママにはお会いできるが、他のさくら道を愛する多くの人々に会えない寂しさはあった。さくら道の素晴らしさは日本列島を縦断する迫力ある大パノラマだが、さくら道を愛する人々がそこにいてこそ、佐藤良二さんが幸せを願ったさくら道となる。

8月31日に届いた参加要項が届き、翌9月1日に申込み書と参加したいという気持ちを綴った手紙を入れて送付した。7年振りの感動に今から胸躍る毎日である。

太平洋と日本海を桜でつなごう

